

## 『長谷川誠三—津軽の先駆者の 信仰と事績』を出版して

岡部 一興

### はじめに

長谷川誠三は、事業家として教育家として優れた足跡を残している。にもかかわらず、歴史に埋もれている。その原因を考えると、弘前女学校の設立者で校主であったがメソジスト教会から非制度的教会であるプリマス・ブレズレンへと離脱した時、弘前女学校から名前を削除された。プリマス派への離脱が、当時のキリスト教界に波紋を投げかけ偏見と誤解を生み、長谷川誠三そのものが正当に評価されてこなかったことに起因しているのではないと思われる。1977年、筆者は「長谷川誠三研究」（1977年）という論文を発表した。2014年3月、当研究会において、「長谷川誠三」について研究発表をした。その時、長谷川家の方が出席され発表を聞き感激して話が盛り上がり、「長谷川誠三」の本を作成したらどうかという話が持ち上がり、再調査をしこの本が出来上がった。私たちは彼の生き方から多くのことを学ぶことができるという点から研究を進めたのである。

### 1. 生い立ち

長谷川誠三が生まれ育ち67年の生涯を過ごした故郷は、「青森りんご」で有名な東北の津軽であった。青森県南津軽郡藤崎町は地勢が平坦で、2018年度の人口は15,139人である。畑と水田、りんご畑を持つ典型的な兼業農家地帯である。長谷川誠三は、定七郎とタキの長男として1857（安政4）年4月25日に生まれた。誠三は藤田匡（旧名寛吾・盲人牧師）とともに神童の誉れ高く、1869（明治2）年12歳の時、藤田立策（寛吾の父）につき漢籍を講読した。その後、14歳でこの塾の主任教授として迎えられた。また書にも長け、書家平井東堂に師事。

### 2. 藤崎教会と長谷川誠三

#### 本多庸一と長谷川誠三

本多は、1848（嘉永元）年12月28日津軽藩弘前城下に生まれ、三百石を取る藩の重鎮の子弟であった。本多は受洗について、「キリスト教を信ず

るに至った強い動機は我が祖国のため」、「我が国が、西欧諸国とくらべて多くの点で大層立ち遅れていることを知った時、私たちは、祖国を先進諸国と同じ水準まで引き上げたいと切望したのです」（『本多庸一先生遺稿』）と述べている。長谷川もこの「祖国のため」「日本を先進諸国の水準まで引き上げる」という思いを持っていたのではないかと思われる。来日したプロテスタント宣教師たちの中には、南北戦争に従軍して活躍した者がいた。熊本バンドのキャプテン・ジェーンズ、W. S. クラークなどに代表されるように、その軍人的気質と武士道的精神が心情的にマッチして、武士の子弟たちを魅了した。弘前教会を形成したジョン・イングも北軍の騎兵大尉として活躍。1874年12月本多はイングを伴って帰郷し稽古館の後身である東奥義塾の塾頭となり、75年10月公会を創立させた。この時、日本基督公会の一教会として加入したが、本多は現実路線を取ってメソジスト派のイングと教会形成に励み、76年12月20日メソジスト・エписコパル教会に所属したのであった。88年3月イングは帰国、35名の受洗者を出し日本初のメソジスト教会を設立。

#### 藤崎教会

青森県における民権運動が活発化し、1881（M14）年本多庸一や菊地九郎などが国会開設建白書を元老院に提出した時、誠三は藤田匡と共に藤崎地方の委員となって活動、ここに本多庸一の影響があった。当時弘前における「共同会」が中心的な結社として活動した。ところが1883年に自由民権運動の中心的な結社である「共同会」が解散すると、彼は村会議員、郡会議員になっていたが、県会議員に立候補して落選すると、次第に実業界に舵を切るようになった。1882（M15）1月8日、藤崎では藤田匡と須藤勝五郎が最初に受洗。この年佐藤勝三郎宅が集会所となる。84年6月15日勝三郎、藤田奚疑受洗、同年10月勝三郎、沢井弘之助を青森より招聘する。続いて沢井が藤崎小学校校長となる。その後、次々に受洗者が出たが、誠三はなかなか受洗しなかった。85年10月16日C. W. グリーンが藤崎において最初の洗礼式を長谷川誠三宅で行なった頃を契機にキリスト教に関心を持

つようになった。87（M20）年6月14日、献堂式の日には7人の人たちと一緒に受洗するに至った。彼は酒造業をやめ、味噌醤油製造業に転じ、禁酒運動を推進、日曜学校の校長を引き受け藤崎教会の柱石になっていった。

### 3. 「敬業社」青森りんごのパイオニア

青森りんごは、全国の56%を占め、長野の19.8%を断然引き離している。これは先人の努力によるものである。青森県でいち早くりんご生産に手を付けたのは、藤崎の「敬業社」で、パイオニアといえよう。1885（M18）株式会社によるりんご園が、藤崎町の真名板縁に開園。7町5反歩の土地に何千本と言われる苗木を植えた大農経営であった。その中心は長谷川誠三と佐藤勝三郎。敬業社の成功によってりんごが注目され、「金のなる木」と騒がれ、多くの農家がりんごを生産、今日の青森りんごとなったと言っても過言ではない。小学校の教員の給料5円の時代、1890（M23）年から7割配当を出し、1896（M29）年には配当金は誠三1,050円、勝三郎750円の配当を出した。しかし、綿虫駆除に手を焼き支出が増加、開園して18年で、閉鎖に追い込まれ、1901（M34）年、佐藤勝三郎個人の経営になる。その集団は信仰者を中心とする近代的な株式会社経営に基づくもので、そこでは何らかのプロテスタンティズムの倫理からくる進取的精神の作用がその企業体を支配していたと考えられる。そこにはいち早くりんごの商品性に着目して、誰れも使用しないような劣等地を利用して大規模経営を起こした背後には、キリスト教信仰から押し出された合理主義的な利潤獲得をめざす経済倫理——エートスの躍動を見出すことができる。そこでは職業を神から与えられた聖なるものと捉え、与えられた家業に勤しむことが神に仕える道であるという考え方が見える。その家業に励んだ結果得られた収益を聖なるものと受けとめ、蓄財に耽るのではなく次の投資に向け、あるいは社会に還元していく長谷川の姿勢を見ると、M・ヴェーバーの名著「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の日本版を見る思いがする。

### 4. 弘前女学校設立

青森県の学校教育は東奥義塾から始まった。弘前藩の稽古館が廃校となりそれを引き継いだ。1875年義塾に小学科を置いたが82（M15）年に廃止された。同年2月函館にドイツ駐在公使夫人カロライン・ライトの寄附が契機となって「来徳（ライト）記念学校」を開設、遺愛学院（現遺愛学院）と改称。第一期生6人全てが弘前出身、二期生も弘前の出身であった。本多庸一はハンプトン校長

と協議、弘前教会の一室で、86年5月から遺愛女学校の分校として始まった。本多は同年10月仙台教会牧師、東京英和学校（現青山学院）の校主となり弘前を離れた。彼は弘前を離れるにあたり、この女学校の責任を負う人物は長谷川誠三において他にいないと考えた。ここに、1888年6月長谷川は「女学校設立趣意書」を作成、賛同者を募った。「女子は文明を生む母氏なり」に始まる格調高い文章で書かれたもので、当時の女子教育は遅れが甚だしく、公立の女学校青森県立第一高等女学校が誕生するのは、1901（M34）年であった。設立趣意書を見ると、キリスト教教育を施すにあたり広く賛同を得るためにキリスト教の文字を入れなかった。1889（M22）年5月弘前女学校の設立許可があり、誠三は設立結社人として米国婦人伝道会社と契約書を結んだ。①米国メソジスト派の婦人外国伝道協会から校長を派遣、②教育はキリスト教主義による。③創業費、校舎修繕費は結社人が負担する。学校経営は結社人が責任を負う形の学校で、純粋なミッション・スクールではなかった。校主長谷川誠三、副教頭本多テイ（本多の妻）が就任し、尋常小学校4年、高等小学科4年、本科3年の一貫教育であった。

### 阪本町への移転

1898（M31）年には、生徒100名を超えたため坂本町に移転。J・ヒュエット校長と教頭工藤玖三（きゅうぞう）が長谷川と相談しつつ校舎の建設と教育制度の整備に励んだ。大工町1番地（本多東作所有）から阪本町3番地、計723坪6合8勺1901年2月、新校舎に移転。校舎建築費5,000円、そのうち長谷川1,200円負担。幼稚園、尋常小学科（4年）、予科（高等小学科2年）本科（高等女学校程度5年）、裁縫専修科（4年）の一貫教育。生徒状況：1897年90人、98年100人、99年150人、1900年160人、01年（180人）年々増加。※1899（M32）年文部省訓令12号発布されると、フェリスでは200名いた生徒が、7年後には34名に激減。

### 5. 事業家長谷川誠三

（1）藤崎銀行 1896（M30）年1月4日開業。頭取長谷川誠三、取締役郡会議員呉服商山内勘三郎、地主田中権十郎、取締役兼支配人佐藤勝三郎、監査役佐々木音次郎、福井助五郎、清野千代吉、総株主数74名。株主には村長清水理兵衛、藤崎産業組合設立した藤崎教会の会員藤本徹郎、勝三郎の妻なか、兄衛等、誠三の娘まつ、婿英治、次女きみ、婿長治、実弟棟方定次郎等。長谷川家823株、佐藤家315株。りんご、馬鈴薯産業に対する支援、銀行業務、商事会社の機能を組込み株式や穀物取

引もした。1920年第一次世界大戦後株式の暴落、関東大震災のあおりを受け1927（昭和2）年長男長谷川潤の時、誠三が関係していた弘前商業銀行に合併。

**(2) 一大倉庫建設** 間口20間、奥行30間、10棟ほど作る。農産物の集荷センターとなる。それらの倉庫の一つが残っていて現在も使用している。間口20間、奥行30間の広さ、屋根は銅板葺き、中央に太い柱があり、地面にはレールを敷きトロッコで生産物を運ぶようになっている。簡易冷蔵庫（りんご）もあった。

**(3) 雲雀牧場** 青森県には13の牧場があり、3,000町以上の牧場が3カ所。雲雀牧場は3,296町を有し三大牧場の一つで三番目に大きく、明治11年10月上北郡有戸村（現在の有戸地区）に士族授産事業の一環として設立。94（M27）本多の弟西館武雄が場長に就任、96年に東奥義塾塾長に転じたので長谷川が関係するようになった。実際の管理は長谷川英治が行なった。周囲に土塁、木柵を築造、動物の逸走を防いだ。馬40頭、牛350頭、綿羊500頭を飼育、馬、牛、羊の改良を目的として、千葉県三里塚、北海道帝大農園より種牛を購入。

#### 雲雀牧場と乃木希典（まれすけ）

長谷川誠三は乃木大将と密接な関係にあった。1896（M29）12月乃木が台湾総督に着任の際、日清戦争の戦場で使用した「英号」を休ませる為に雲雀牧場に下付。英号はアメリカ合衆国18代大統領グラントがもたらし、南北戦争で北軍を勝利に導いた將軍で、79（M12）年国賓として来日。名馬「グラント」を帝室に献上、英号はグラントを父として北海道七重御料牧場で産したのを乃木が愛用。98（M31）乃木が愛馬を見に雲雀牧場を訪問、長谷川英治と懇談した。

**(4) 三つの鉱山：** 長谷川誠三は3つの鉱山を所有していた。秋田県鹿角郡（かづの）小坂町にある小坂鉱山である。西又鉱山、相内鉱山、栃窪鉱山。国内の鉱山の発掘に力を入れていた。この鉱山は1816（文化13）「金・銀」の鉱山として開発が始まった。1901（M34）年銀の生産高では日本一になり、精錬技術が向上すると黒鉱（くろこう）から銅、亜鉛、鉛などの生産が盛んになった。現在は、1990（平成2）年に操業は中止された。

**(5) 石油の建言書提出：** 1911（M44）年内閣総理大臣桂太郎に「建言書」出した。長谷川は日本石油の大株主で、国家的見地から見て石油事業はどうあるべきかを論じ説得している。将来国家にとって石油が不可欠な産業になると考えていた。当時石油は、国内需要の三分の二以上を外国

油に依存、そのため外貨流失が必至となり、日本経済に与える影響大なるものがある。本来自国の消費物資は自国で賄うのが原則である。当時日本では日本石油、宝田石油会社があり、日本石油の大株主として会社の経営陣との深いつながりから、いわば石油業界を代表して提出した。その点から国内の石油を調査して、少しでも国内の石油を発掘する必要があることを主張した。しかし、採掘するとなると莫大な資本がいる。そこでわが国経済発展のために、こうした産業を保護奨励する必要がある、それには資金援助や社債発行の特権を与えることが大切であると切々と訴えている。参考文献：『長谷川誠三—津軽の先駆者の信仰と事績』教文館、2019年（つづく）

## 吉原重俊とS. R. ブラウン

吉原 重和

### 1. 薩摩から江戸へ

吉原重俊は鹿児島島の西田村之内字常磐で弘化2年（1845）に生まれ、幼名弥次郎と称し藩校造士館に学び8歳の頃から秀才の名が高かった。文久2年（1862）4月23日薩摩藩討幕急進派が京都伏見の船宿、寺田屋に集まって決起を企てた寺田屋騒動に攘夷派の志士として参加したが鎮撫され、国元謹慎と成った。同年8月の生麦事件が原因で、翌年の文久3年（1863）6月27日薩摩藩は英国と戦う事になる。

この時、西瓜売りに化けた薩摩の者が英国の軍艦に乗りこみ英国人を斬り、船を奪い取るという計画であったが、英国側に見破られ失敗に終わっている。

重俊も大山巖等と共に西瓜売り決死隊に参加した。薩英戦争後に吉原弥次郎（重俊）は大山弥助（巖）等と共に藩から選ばれて江戸に遊学、重俊は勝海舟が赤坂田町に開いた私塾「氷解塾」に3人の遊学生と共に入塾した。藩は江戸の探索方を通じて彼らに横浜の情勢を探らせていた。更に当時横浜の居留地に有った横浜英学所で英語を教えていたオランダ改革派教会宣教師のS. R. ブラウンに英語を習う事に成った。彼はマサチューセッツ州のモンソンアカデミーに学び、1832年イエール大学を卒業した宣教師で、マカオのモリソン記念学校の校長を務めた後に米国に戻りオワスコアウトレット教会の牧師をしていた時にABC FMからフルベッキやシモンズと共に1859年（安政6年）に日本に派遣された。

## 2. 薩摩藩第二次米国留学生

第一次薩摩藩英国留学生達十九名が申木野をグラバーの所有するオースターライエン号で密航出国した翌年の1866年3月26日に更に五名の若者達が長崎に居たフルベッキにフェリス宛ての紹介状を書いてもらって英国経由で米国へ向うために変名を名乗り長崎から密航した。彼ら5名の名前は仁礼景範(島田カンイチ)、吉原重俊(大原令之助)、湯地定基(工藤十郎)、江夏嘉蔵、種子島敬輔(吉田彦磨)であり、後発組の、木藤市助(芦原洲平)谷元兵右衛門(道之)野村一介(高文)を加えた8名が薩摩藩第二次米国留学生と呼ばれた。最初の寄港地の上海に上陸した彼らはPresbyterian Board of Missionary Pressに館主のガンブルを訪ねた。ここは美華書館とも呼ばれ、ブラウン、ヘボン達が印刷所として利用していた。ここで大原は「The Heavenly Way」の漢語訳である「天路指南」をもらい、米国に至るまでの間に船中で読んだ事によってキリスト教に興味を持った。4月28日に英国船に乗り換え、上海を出航、ロンドンを経て9月27日にニューヨークに到着した。

彼ら5名の面倒を見てくれたのはChina & Japan Trading Co.の創設者のW. H. Foggだった、この会社は1900年代まで国内に存続し1878年から築地の米国公使館はこの会社の所有地を借りていた。彼等は11月4日にはボストンから西へ90キロのマサチューセッツ州モンソンにある全寮制のイエール大入学の予備校であるモンソンアカデミー英語科へ入学した。ここはブラウンの母校でもあった。誠忠組だった木藤(芦原)はハモンド学長に英語を習ったが後に謎の自殺を遂げた。仁礼の日記に村人が総出で芦原の行くえを探したとある。折しも横浜の大火でモンソンへ戻って来たブラウン牧師が木藤の葬儀を行った。

## 3. 新島襄との出会い

「昨年十一月、薩洲侯のご家来六人程ニューヨークへ到着致し、その内一人(吉原重俊)当所へ参り、小子を尋ねくれ候。「新島襄の手紙」より1866年 11月~1867年3月ごろ。ボストン近郊のアンドーバーの神学校に留学していた新島襄は密航留学の身なので、幕府関係者との接触は避けていたが、同じ密航留学生であるモンソンの薩摩藩留学生達とは交流があり、お互いにキリスト教への理解を深めようとしていた。

## 4. 大原令之助の受洗 1869年1月10日

ブラウンはオーバーン近郊Owasco outletのオランダ改革派教会で1869年1月10日に若い薩摩藩留学生である大原令之助(吉原重俊)に洗礼を授

けた。この教会は別名Sand beach教会とも呼ばれ現在ではホテルのバンケット会場として使用されている。ブラウン夫妻、フルベッキ夫妻はこの教会に所属し、キダー女史も近くのSpringSideの学校で教師をしていた。彼らが日本を訪れたのもこの教会が原点であり、岩倉使節団もその流れの中に存在したとも言える。ハモンド学長の推薦状には大原がOwasco outlet教会のメンバーであると記されている。

W. E. グリフィスが書いたA Maker of the New Orient 1902. 8はブラウン牧師の伝記であるが215ページに「最後に大原が受洗した」と少しばかり書いてある。New York Observer 紙 1869. 3. 18にブラウンが寄稿した大原の信仰告白文は以下の通りである。

「私は異教徒の国で生まれて偶像崇拜と様々な種類の迷信の中で育ちました、そして私には神に関するどんな知識と彼の救済もありませんでした。私は早くに学校に入学して、そこで孔子の教えを学びました、結果として魂は肉体と共に滅びる事をしっかりと信じました。また、私は、世界に存在する万物が、自然の産物であり、それらを作りだした存在もなかったと思いました。また、孔子と追隨者が教えたように、私は心の純粹さを信じました。それらが非常に重要であり、キリスト教の主義に直接に反対であるので、私はここにこれらの3つの記事を書きました。数年が過ぎ去り、私が暗黒の闇から光の中へと生まれ出る時はついに来ました。それはここへの私の国からの出発でした。この国に来る時でした、私は中国語で書かれた一冊の本を得ました、それは上海の宣教師によるキリスト教に関する本であり、これがこの件に関して書かれた最初の本であり、私が今までに読んでいて最初に私はそれに関して少なからず知識があった本でした。」以下略

結果としてモンソンとニューブランズウィックで吉田清成、湯地定基、吉原重俊、畠山義成の4名の薩摩藩留学生達が受洗した。1869年7月1日にモンソンアカデミーの卒業式において大原令之助が“Japan as it Was and Is” 種子島敬輔が“Introduction of Christianity into Japan” というスピーチをした事がNYタイムスにて報じられた。

その後ハモンド学長がYale大のWoosley学長に宛てて長文の推薦状を書いてくれた結果、大原はYale大初の日本人留学生として入学する事が出来た。

## 5. Gibbs家について

Josiah Willard Gibbs Sr.はYale大学の神学専門

大学院で宗教文学の教授をしていた。  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Josiah\\_Willard\\_Gibbs\\_Sr.](https://en.wikipedia.org/wiki/Josiah_Willard_Gibbs_Sr.) (30 April 1790 – 25 March 1861) 彼は1812~1814そして1817~1839の間Yale大で修辞学と礼拝の教授であった。Gibbs教授は1842年にボストンで創立されたAmerican Oriental Societyの創立者である。会員にはYale大の学長のT. D. Woosley、教授のW. D. Whitney, コネチカット州教育長官B. G. Northropが居た。上海のOlyphant & Co.のOlyphantがYaleカレッジに行き宣教師の派遣を要請した時に、モリソン協会の活動に賛同したSilliman、Goodrich、Gibbsの3人の教授が推薦して送り出したのがS. R. Brownだった。そして彼の息子でYale大教授で熱力学の権威だったJ. W. Gibbs Jr、更に娘婿のAddison Van Nameと一緒に住んだのが大原令之助だった。Van NameはYale大卒でYale大の図書館を作った事で知られている。大原は明治維新後に新政府の中樞を担う目的で育成されていたと思われる。

## 6. 欧州にて

在学中に官命で大山巖、品川弥次郎、中浜万次郎等と欧州に向かい、普仏戦争観戦武官団に参加(1870.11)し近代戦の様子を観察した。その後明治新政府がフランクフルトのドンドルフ・ナウマン社に印刷させた紙幣(通称ゲルマン紙幣)の印刷を監督するために1871.3から1872.1まで同地に滞在していたと思われる。

## 7. 岩倉使節団1871.11(明治4年)~1873.9(明治6年)

1871年の11月11日横浜を出帆し米国、英国、仏、独をはじめとする欧米14カ国の視察に出た、岩倉具視、大久保利通、伊藤博文、木戸孝允、佐々木高行他106名にものぼる大使節団であった。大原令之助は紙幣印刷の監督のため駐在していたフランクフルトから1872.3.2米国へ呼ばれ外務三等書記官として使節団に現地参加した。米国大統領グラントへの謁見の2日前に辞令がでるという慌しさだった。前年に同じルートで派遣されタムソンが同行した13大藩使節団との関係性が注目される。条約改正のための天皇の委任状を取りにワシントンから日本へ戻る大久保、伊藤に同行し帰国、その後再度ワシントンへ戻った。

## 8. クリスマン留学生達の沈黙

帰国した密航留学生達は多くが官職を得たので、自分達がクリスマンである事は公言しなかった。フルベッキやフェリスは彼らが官職を得て国の有益な人材と成る事を望んでおり、その為にはあえてクリスマンとして振舞わない方が良くと考えていたようだ。畠山、大原、吉田、折田達はこ

のアドバイスに従ったのだろう。新島襄はアメリカンボードから派遣された宣教師であり、彼らとは異なっていた。

## 9. 明治新政府の官吏として

英国から帰国した重俊は1873年4月19日に外務省五等出仕の辞令を受けて明治新政府の官吏としての道を歩み始めた。大久保は「明治六年の政変」後ますます日本の政体確立を急務と考え、吉田清成大蔵大輔と吉原重俊租税助の二人に対して政体取調べを委嘱しており三者はしばしば集まって協議し太政官の職制、三権分立、天皇大権、議会の組織等が話し合われた。1874.7.14から重俊は横浜税関長を兼務していたが、8月2日から11月まで台湾事件の処理の為大久保利通に随行し高崎正風、ポワソナードらと共に清国に行き交渉にあたった。

## 10. 日本銀行初代総裁就任(1882.10)

明治15年6月27日 日本銀行条例公布、同10月6日吉原重俊はその初代の総裁に就任、重俊が38歳の時である。同月10日を以て日本銀行は開業した。

重俊は日本銀行在任中の明治20年十二月十八日、病気のため死去した。時に重俊四十二歳の若さであった。彼は幼少の頃から漢学国学に通じ、長ずるに及び英語にも精通、いわゆる和漢洋に通じた貴重な存在であった。又、温厚篤実で清廉な紳士として世に知られ、日本銀行の伝統的な慎重さは初代総裁のこの性格によるとも云われている。

## 参考文献

1. 林竹二 幕末の海外留学生の記録
2. 犬塚孝明 明治維新対外関係史研究、薩摩藩英国留学生、鮫島尚信在欧外交書簡集
3. 日本銀行 編 日本銀行百年史、日銀総裁列伝
4. W.E. Griffis A Maker of the new Orient: Samuel Robins Brown



## 一つの植民地像

### —聖園農場、坂本直寛を手掛かりに—

吉馴 明子

定年退職した2009年以後私は植村正久を歴史状況の中で読み解く事を課題として研究を続けて来た。丁度2007年から刊行された雨宮栄一の『植村正久』伝3巻からも刺激を受け研究をスタートさせた。2010年には「若き植村正久の伝道路線」(「社中」=ヴォランティア・アソシエーションの重要性を説く福澤諭吉の文明論の影響が見える)を発表した。以後、正久を伝記的に追って2016年日露戦争期の「文明・戦争・キリスト教」観を発表した。

いよいよ正久の朝鮮伝道＝殖民地伝道が見えるところまで来たわけである。3.1運動前後に、正久が残したのは次のような文章である。

「朝鮮のキリスト者が国を憂え、独立を重んじ、その威力に対して反抗の氣勢を保つということが事実ならば、たとい根が浅く、中学生徒の無暗に威張るような生意気であるにもせよ、高尚な精神的方面から人道の側に立ちて、これを批評するならば、かえって末頼母しく、後世恐るべしと言うが適当であるまいか」（「朝鮮のキリスト教」）

殖民地伝道というと「殖民地支配」のための伝道を考える。事実組合教会の場合にはそうだろう。しかし、もし「殖民地」が支配の対象でなかったら、どうか。そんなことを考えていた私の目前に「内国殖民地」北海道が現れた。それってなんだ？

たしかに、国の政策としては、大資本家が小作を使って北海道を開拓させる。土地は小作人のものにならない。もっと安易な労働力として北海道に作った集治監（監獄）単位の「囚人労働」もあった（参考：小池喜孝『鎖塚』）。それが「内国殖民地」でイメージされる開拓地北海道の実態だったらしい。しかし、これとは異なるキリスト者による開拓農場もあった。その一例が自由民権運動家武市安哉と坂本直寛を中心とする高知からの入殖者たちの場合である。ICU時代に朝比奈嫩葉さんからもらった『坂本直寛・自伝』を手がかりに考えたい。

直寛は高知でアメリカの宣教師や植村正久らの伝道によってキリスト教に近づき、受洗した。1897年には北海道開拓のために「北光社」を設立して北見地方へ入殖し、その後武市安哉の「聖園農場」へ移り、植村正久と再会して朝鮮に関する評論を『福音新報』に書いた。つまり、直寛は植村の朝鮮伝道と、キリスト教殖民とをつなぐ人物である。直寛の孫「坂本直行のブロンズ像」とエッセイ（嫩葉さんの父上、朝比奈英三北大教授による）が、北大山岳部のHPにある。直行の『開墾の記』は、北海道の雄大な自然の中で「開拓農場」を開くには、厳しい自然との闘い、強い決意と労働が必要であろうことを教えてくれた。

## 1. 高知伝道と自由民権運動

坂本直寛と武市安哉は同じ時期に立志学舎に学び、1877年卒業するかせぬうちに、民権演説を始め、新聞に投稿した。武市は79年から、坂本は84年から県会議員となり、板垣退助を総理とする自由党员として地方遊説にも出かけた。彼らが県議の時、浦戸港浚渫問題や物部川堤防修理の問題が起こって、県議たちは様々に活躍したが、武市と坂本が連名で堤防修理費の負担をめぐる意見書を

内務省県治局に提出した事もある。他方、彼らは1884年11月頃から始まった高知伝道でフルベッキ、ナックス、さらに植村正久らの話を聞いてキリスト教に近づき、1885年5月坂本直寛は片岡健吉、西森拙三らと共にナックスから受洗し高知教会の創立メンバーとなった。武市安哉も同年8月受洗した。彼らの演説会は民権演説会であり、伝道会でもあった。

1881年『高知新聞』に掲載された坂本直寛の「政論」では、スペンサーの『社会平権論』によって専制政府と共に、自由民権陣営に巢食う封建的割拠主義や旧土族的特権意識を批判した。また、ミルの『代議政治論』によって、議会政治の前提を自主的積極的な人間類型の中に求めた（山下重一）。直寛はやがて立志社「日本憲法見込案」の作成にも携わった。1887年3月片岡健吉と坂本、武市らは三大建白運動の高知代表17人の一員として上京し保安条例違反で逮捕され、1889年2月に大日本帝国憲法発布の恩赦によって出獄するまで石川島監獄に収監された。獄中で片岡と坂本は聖書を読み祈る生活に徹し、武市と細川良昌は労役に服す間に他の囚人にキリスト教を伝えたという。坂本はある時「申命記8章」を読んで、モーセのイスラエル建国に思いを致し、「神の御心に適うのであれば、将来一つの事業を興したい」「天啓として聖意に適った信仰共同体による拓殖事業」を思い描くようになった。出獄後、片岡健吉、武市安哉はそれぞれ衆議院議員となった。直寛は、妻鶴と二度目の妻翠を亡くし、2歳になる直道の赤痢という苦しい日々を送りながら県会議員をつとめた。

## 2. 北海道への開拓入殖

### a) 聖園農場－武市安哉

1892年秋、開拓用地払い下げ問題の財務調査のために北海道へ出張した武市は、「目の届く限り続く原生林と未開の草原」を見て、山間の狭い土地を耕している故郷の土佐との違いに大きなショックを受けた。その足で北海道庁長官北垣国道（元高知県知事）を尋ねて入殖の相談をした。北垣から月形村の樺戸集治監を紹介され、原胤昭教誨師、大井上典獄と共に、集治監用地の浦臼を实地見聞し、その領地70万坪の払い下げを申請した。帰京後第4回帝国議会終了を待って1893年3月辞職。高知へ帰って、資金調達と入殖希望者募集活動をした。6月貸下げ許可が出、7月第一陣として27名が入殖した。この第一陣には、自由民権運動の仲間が多く、キリスト者は5人と多くはなかったが、入植するとすぐに「祈りの家」を建てて聖園

教会を作り、日曜日の礼拝出席と、酒類販売と飲酒の禁止を申し合わせた。当時禁酒はキリスト教とセットだったので、聖園農場での生活はまさにキリスト教を柱とするものだった。聖園という呼称も、清教徒のアメリカ移住にちなんでつけられたものであった。土曜になると武市は各家を廻って、日曜の礼拝に誘い、朝の礼拝で安哉が短い分かりやすい説教をすることが多かった（在京時代、武市は富士見町教会に出席）。

運営面では、安哉が農場長、補佐前田駒次、書記平井虎太郎、農事顧問を小野田卓弥に依頼して、土地の決定から農具や生活必需品の購入、資金等について、すべて協議するシステムを作り上げた。第2回の移住者約200戸は1894年4月に到着し聖園農場は本格的にスタートしたが、12月2日第3次の入殖者募集を終えて、高知から北海道へ戻る船中で武市は急逝した。聖園農場は武市の3男健雄と土居勝郎に引き継がれた。

#### b) 坂本直寛の場合ー北光社から聖園農場へ

武市死後2年目の1896年5月、直寛は澤本楠弥と共に北海道視察旅行に出発した。日清戦争後のロシアの南下を見て、北海道にこそ「北門の鎖鑰」となる「自由と自治」なる「開拓植民地」必要と考えたからである。まず札幌でクネップ原野貸下げを申請し、8月20日聖園農場の前田駒次を案内人として、澤本楠弥、西原清東と共に馬6頭を連れて、3日がかりでクネップ原野へ着いた。「鞭あげて野辺はせ行けば黒駒のひずめの風に萩が花ちる」アブラハムがカナンに移住した事績を思い起こし、原野にひざまずいて「神に感謝し…将来について祈った。坂本と澤本は、その土地が「地形広大、地味良好にして開拓容易なる」ことを高知へ打電し、レポートを送った。報告を受けた高知では、坂本直寛を社長、澤本楠弥を副社長に合資会社・北光社を創設し、農村へ出かけて移住希望者の募集活動を開始した。周辺の農村地帯からの応募者が多かった。これに先立ち、坂本は理想の植民地について次のようにまとめた。①必ず労働の場でなければならぬと、遊惰を斥けた。②植民地の繁栄は個人の思想と労働によるもので、遠隔地からの指示操作によるものではない。③行為の自由がなくてはならず、干渉によって発達することはない。④殖民の品行高潔によって植民地は盛んとなる。

1897年3月500人以上の移民団が北海道へと出発した。クネップに着くと、仮小屋に住み、生い茂る草を刈り、樹木を切り倒す作業が早速始まった。社長直寛は全体統括の他に、種や苗の入

手、食料の確保などのお役目があったらしい。3ヶ月後の8月下旬、「(入殖中に流行りだした)麻疹も沈静し、開墾はようやくはかどり、種蒔きも終わり、万事平穩に戻ったので」、澤本楠弥を社長代理に立て、直寛は聖園農場へ向かった。キリスト教信仰中心の農園建設プランに入殖者の賛成が得られなかったためであろうといわれる(土居晴夫)。こうして直寛は「聖園農場」の一員となった。クネップの開拓は澤本楠弥と前田駒次に委ねられることになった。入殖者を励まして澤本楠弥は常呂川の氾濫被害処理にあたり、交通輸送条件の整備、道庁との交渉等々地域のためにも働いた。農場長を引き受けた前田駒次はサヤインゲン、ハッカなどの地産野菜を売出し、やがて水稻栽培にも成功した。移住から3年後の1900年5月には、前田駒次、中田米太郎ら5人が市村柳吉宅に集って礼拝を開始し、G.P.ピアソン宣教師(米国長老教会)の応援伝道を得て、1903年北光社講義所(現北見教会)が開設された。北光社は北見教会も含む地域発展に大いに貢献したといわれる。

#### c) キリスト教開拓植民地の教会・信仰

以上述べたように高知から厳寒の地北海道への入殖者は、初め「聖園農場」と「北光社」に別れたが、武市=土居・坂本の「聖園農場」が本拠で、坂本・澤本=前田の「北光社」は支店で始まり、やがて北見地方で独自の役割を果たした。では、聖園農場が北海道開拓殖民政策の中で果たした独自の役割は何であったか。それは①自由民権運動で培われた自発的活動で結ばれた人間関係、②厳しい自然環境からの挑戦で必要とされるピューリタンの労働、③聖書のみことばと信者たちの交流の中で得られる生き生きとしたキリスト教信仰、これら3つの要素を組み合わせ「開拓殖民によるキリスト教農園共同体」は立てられたことである。権力・資力から自由な共同体であった。その中心となった教会は、教会員たちの全生活における交流の中で、信仰の形を培ったと考えられる。現在のような都市化した生活の中の、「内的」「精神的」信仰においてのみ、相互理解が得られる教会生活からは望み得ないのかもしれない。

---

#### 著書紹介

『日本キリスト教歴史人名事典』鈴木範久監修・教文館、2020年8月25日刊行。5150名を収録、1549年ザビエルによってキリスト教が伝えられ、今日までの最新の研究成果を踏まえたものになっています。通読すると日本のキリスト教の特徴が現れていて面白いです。

## 南 精一先生を偲ぶ



岡部 一興

南精一先生は、去る2月23日に逝去されました。97歳でした。ご遺族の上に主の慰めをお祈りします。2月15日に神奈川県立高校の

入試がありまして、翌日新聞に英語の試験問題が掲載されました。奥様の愛子さんが掲載された新聞をホームの「ふるさと」に持参すると、すでに回答してしまっていて、「いい問題だった」といって、元気になっていたそうです。南さんは、横浜プロテスタント史研究会が発足した時からの会員でした。1981年9月19日横浜開港資料館において、高谷道男先生が「ハリスについて一日本宣教への功績」について発表を行ないまして、今日まで研究会が続いています。8年前頃から脊椎間狭窄症で歩くのが不自由になり、例会には出られなくなりましたが、それまでは毎回熱心に出席していました。南さんから聞いていることを少し詳しく触れますと、父の政市さんがユタ州ソールトレイクシティにおいて鉄道関係の仕事をしていた関係から日常生活に英語を交えた話をする事があり、英語に興味を持ちそれが英語教師になる動機になったという。

南さんは、和歌山県串本町に生まれ、串本商業学校を卒業すると地元で小学校の先生を2年ほどした後、1943（昭和18）年青山学院英文科に入学しました。後述しますが翌年戦時教育非常措置法により、青山学院文学部が明治学院専門学校に吸収されることになり、1946（昭和21）年3月明治学院の卒業となりました。折角青山学院に入学したのに、明治学院の卒業になってしまったことを悔やんでいました。同級生の阿部志郎先生も同じように青山学院から明治学院の卒業になりました。在学中の昭和19年6月になると、南先生は勤労動員となり横浜の三菱造船所で働くことになり、明学に行くのは月1回給料が支給される日だけで、その日は礼拝を守ったそうです。当時は横浜西区の軽井沢に寮があり、高谷道男先生や竹中次郎先生も寝食を共にした。朝礼では軍人勅諭を唱和させられ、朝食後工場に向かう毎日でありました。ある日のこと、朝食後学生がぐずぐずして工場に行かないので、学生指導の竹中先生は大変困って、学生に向かって君たちが工場へ行かなければ明治学院は潰されると言って学生たちを叱咤激励した

ということを言っていました。

昭和21年明治学院を卒業すると、東京は食糧難だったので、故郷で中学の英語の先生をしました。昭和26年東京に出て、昼間は東京都立中学の先生をしながら、夜は明治学院大学の英文科に入って勉強したという。英文科では小島一郎牧師の奥さまの小島清子姉、横浜女学院の英語の先生になった稲垣嘉一郎兄、明治学院大学の職員になった三浦正雄兄らと学びました。三浦さんの紹介で青山教会に通い、横浜に転居してからは海岸教会に出席していたが、高谷道男先生に久しぶりに顔を合わせました。その時、私の通う教会は横浜指路教会であると思うようになり、小島一郎牧師に受洗を願い出て、1972年5月21日の聖霊降臨日に洗礼を受けました。

都立中学定年後は、文教大学附属の女子高校の教師をした後、関東学院大学や神奈川大学の英語の講師をし、英学史学会で宣教師研究に勤めました。横浜プロテスタント史研究会では、例会に必ずと言っていいほど出席されました。1997年12月20日の研究会では、「戦時下におけるキリスト教教育と学校の統廃合について一青山学院、関東学院、明治学院」のテーマで発表をしました。

横浜プロテスタント史研究会報の第22号にその発表の要約が掲載されています。1943年11月30日「教育二関スル戦時非常措置方策」に基づいて、(1)青山学院高等商業部、同文学部並びに関東学院高等商業部を明治学院に統合すること。(2)統合の時期は昭和19年4月1日からとすること。青山学院学生450名（在学生313名、出陣学徒137名）、関東学院学生155名は明治学院専門学校第二学年に移籍。なお青山、関東学院は工業専門学校となり、昭和19年4月開校となりました。

以上のように1941年太平洋戦争が始まり、2年後の10月には学徒出陣、それ以来キリスト教学校は軍部や文部省当局から干渉や圧迫を受けるようになり、自らの経験を踏まえての戦時下におけるキリスト教教育がどう変わっていたかを発表した貴重な研究報告でありました。

### 【編集後記】

会報69号をお届けします。2020年2月15日の中島耕二さんの発表を最後に、横プロ研が休会になり、同年10月10日から研究会が再開されました。その後、2021年1月から休会し、いつ再開できるか分かりませんが、秋頃から例会が持てるようになればと考えています。またあまり休会が長引けば、ズームによる研究会も考えたかどうかという意見も出ています。（岡部一興）